



第3章 沼津市の歴史文化の特性

第1節 沼津市の歴史文化の概要

本市の歴史的背景には、前章までに示したとおり、約38,000年前から続く長い歴史があります。また、地理的にも山・海といった自然に恵まれていることや、旧東海道などの陸上交通や狩野川・駿河湾の水上交通が発達したことが、本市の歴史文化をかたち作ってきました。第1章で示した歴史的背景、及び第2章で示した歴史文化資産から、本計画では8項目を本市の歴史文化の特性として位置付けます。

表21 沼津市の歴史文化の特性

	歴史文化の特性	原始	古代	中世	近世	近現代
1	愛鷹山の開拓と利用	○	○	○	○	○
2	駿河湾の恩恵と人々の営み	○	○	○	○	○
3	東西をつなぐ街道沿いの発展		○	○	○	○
4	古代に始まる信仰の軌跡		○	○	○	○
5	自然を制する叡智	○	○	○	○	○
6	人々の生活を支えた伊豆石		○	○	○	○
7	紙と文字により語られる沼津の歴史			○	○	○
8	文化人と沼津				○	○

第2節 沼津市の歴史文化の特性

1 “^{あしたかやま}愛鷹山の開拓と利用”

沼津の先人たちは、時代ごとの需要に応じて、愛鷹山を開拓し、利用してきました。原始社会においては生活の主要な場として、古代には墓域として、中世や近世には牧として、さらに近代以降は茶栽培の場としてなど、その利用の形は時代とともに変化しています。愛鷹山と生きることは今も昔も変わることなく重要です。

(1) 愛鷹山麓に栄えた旧石器・縄文文化・弥生文化



人が本州に到達したのは約38,000年前といわれています。この頃の代表的な遺跡は、井出丸山遺跡《浮島》です。この直後から、縄文時代に移行する約16,000年前まで、愛鷹山の山麓には旧石器時代の人々が生活した痕跡が残されています。旧石器時代は、現在よりも冷涼な気候でしたが、本市は冬季でも比較的温暖な地で、草食動物の餌となる植物が豊富にありました。このため、狩猟対象の動物を追って生活していた旧石器時代の人々が、この地に集まりました。また、緩やかな尾根と深い谷が続く地形的な要因から狩りのしやすい場所であったことも、この地が栄えた理由でした。



井出丸山遺跡出土の約 38,000 年前の石器

旧石器時代に続く縄文時代も、人は山を中心に生活を営みました。縄文時代の最も古い時期である草創期の^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡と土器から、愛鷹山では人々が早くから定住していたことがわかります。特に早期の遺跡では数多くの住居跡や大量の土器が出土していることから、この時期、愛鷹山での人々の活動がより活発になったことがうかがえます。その後も、晩期まで愛鷹山での人の生活が続きました。

その後しばらくは愛鷹山の大規模な利用は見られなくなりますが、弥生時代後期後半から古墳時代前期（2～3世紀頃）には、標高100～200メートルのあたりにかけて、複数の尾根にまたがり約1,000軒もの^{うえだしいせきかなおか}竪穴住居跡が密集する大規模な集落群が築かれました。特に弥生時代後期後半の遺構が多く、特に^{うえだしいせきかなおか}植出遺跡《金岡》のあたりに集中しています。こうした大規模な集落跡から、東日本において最古級の古墳が築かれる素地が、弥生時代後期後半にすでに存在していたと考える説もあります。

（2）愛鷹山麓に展開する墓域

^{たかおさんこふん}高尾山古墳《金岡》は、古墳時代の前期初頭（3世紀中頃）に愛鷹山の山裾に築かれた^{ぜんぽうこうほうふん}前方後方墳で、この時期としては東日本最古級・最大級の古墳です。古墳から出土した土器には、北陸地方や東海地方西部（^{のう}濃尾平野周辺）、関東地方などで作られたものも含まれており、ヤマト王権成立期において様々な地域の人々との交流がうかがえます。

高尾山古墳の築造以降も、愛鷹山裾の台地の上に大型古墳である^{ねのかみ}子ノ神古墳《金岡》と^{ながづか}長塚古墳《金岡》が築かれました。2つの古墳は高尾山古墳とは異なり、



高尾山古墳



前方後円墳です。子ノ神古墳の時期は確定できませんが、古墳時代前期とする説もあります。長塚古墳は6世紀前半に位置付けられ、市内で唯一埴輪が出土した古墳です。

長塚古墳を最後に市内において前方後円墳の造営は行われなくなりますが、その後6世紀後半から8世紀初頭頃まで、本市から富士市にかけての愛鷹山の南麓には、群集墳と呼ばれる直径10メートル前後の小型の円墳が数多く造られています。愛鷹山には山頂から放射状に延びる尾根がいくつも発達していますが、本市から富士市との境周辺にかけては、その尾根のほとんどに、密集して古墳が造られています。その数は県下では最大規模、東海地方でも屈指です。なかでも浮島地区の石川古墳群は規模の大きい古墳群の代表的なもので、1つの尾根に約150基にも及ぶ古墳が密集しています。

愛鷹山麓の古墳からは玉類や鉄製品などの副葬品が多量に出土しており、これらは被葬者の豊かさを示します。また、渡来系の遺物など当地では簡単に手に入れられないものも多く、こうした遺物からヤマト王権や朝鮮半島などとのつながりが想定されます。



石川古墳群（発掘時）

（3）生産の場としての愛鷹山麓

愛鷹山にはかつて野生の馬が生息していました。これらの馬は、源頼朝が愛鷹神社に奉納したという伝承があり、神の使いとして大切にされてきました。その名残は今でも「神馬土手」などの地名に見ることができます。この愛鷹山麓の野生の馬に注目した江戸幕府は、山麓に官営の牧場を設け、捕獲するための施設を造りました。捕まえた馬は、物資の運搬や農業の助けとして人々の生活を支えてきました。馬の供養のために建てられた馬頭観音像が、市内各地に今でも残っています。



愛鷹山麓の茶畑

明治時代になると、江原素六は生活に苦労していた旧幕臣の授産のため、愛鷹山麓で乳牛の飼育や茶の栽培など様々な取り組みを行いました。その痕跡は今でも各地に残っています。近世まで愛鷹山は入会地として周辺集落の秣場などとして利用されてきましたが、明治時代に官有地となり、さらに江原素六らの尽力で払い下げが実現し、その後茶畑などの開墾に取り組んだ結果、今日の



茶業の礎が築られました。

2 “駿河湾の恩恵と人々の営み”

長い海岸線を有する本市では、海の恩恵が人の生活を支えてきました。本市における海を舞台とした人々の生活は、古文書に記され、民俗文化財や遺跡などにも見ることができます。

(1) 駿河湾の自然

本市には海によって形成された地形や名勝地があります。千本浜《第二～原》や淡島《内浦》、大瀬崎《西浦》や御浜岬《戸田》などは、伊豆半島の成り立ちや、地域の地質の構造を知ることができるジオサイトです。

西浦地区の沖合には、エダミドリイシという造礁サンゴの群落があります。造礁サンゴ群落としては北限域ともいわれます。平成8年（1996）に発生した異常低水温とガンガゼの食害によって衰退しましたが、その後の地元のダイバーや漁業関係者などによって保全活動が行われ、徐々に回復しつつあります。また、南部地域には海と陸地が防潮堤などで隔たれていない環境が残っており、オオスナモグリの生息やアカテガニの繁殖が確認されています。

(2) 駿河湾の恩恵

縄文時代の遺跡からは石錘（漁網の錘）、弥生時代の遺跡からは有頭石錘が出土しており、縄文人や弥生人の生活を海の幸が支えていたことがわかります。奈良時代にはカツオが地域の特産品であったようで、平城京から出土した木簡には、「堅魚」が税金として納められていたことが記されています。このように本市では漁業が古くから人の生活を支えており、現在でも漁業や水産加工業は代表的な産業となっています。

静浦地区などでは、江戸時代にタイの畜養（捕まえた魚を短期間飼育すること）が行われていました。今でも養殖魚は本市の特産であり、岸近くに浮かぶ生簀で、アジ、タイなどが養殖され、活魚として首都圏に出荷されています。駿河湾は、湾としては日本一の深さを誇り、なかでも戸田地区は、陸地からわずかな距離に深い海があることが特徴です。近代にトロール漁が始まると、深海魚などが特産物となりました。特に世界最大のカニであるタカアシガニの料理は、戸田地区の名物として知られています。

(3) 海で活躍した人の痕跡

愛鷹山麓ほどの規模ではありませんが、本市の南部地域にも古墳時代後期以降の横穴や古墳が数多く造られています。この地域は海岸線が複雑に入り組み、平地は少なく山地が多い場所ですが、地質的には比較的掘削が容易な凝灰岩質の岩盤が露頭しているた



め、この山の斜面に穴をあけて数多くの墓が造られました。これらは横穴（群）とよばれています。横穴は、主に静浦・内浦沿岸から市外の伊豆内陸部にまで分布しており、市内では江浦横穴群《静浦》が県指定史跡になっています。



井田松江古墳群 18号墳石室

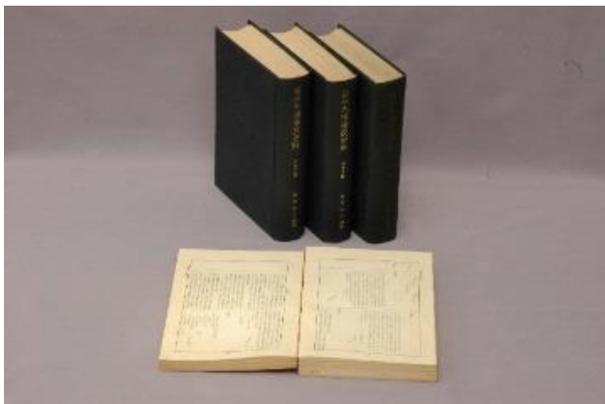
一方、伊豆半島の北海岸から西海岸である平沢《西浦》や井田《戸田》の狭い丘陵上には、横穴ではなく、愛鷹山麓と同じく横穴式石室を有する古墳が密集して造

られました。中でも井田松江古墳群18号墳には、金銅装や銀象嵌の大刀など、当地由来ではない遺物が出土しています。これらの地域は、広い平地がないため農業の高い生産力は見込めないにも関わらず、多数の古墳が造られており、海を舞台に漁撈だけではなく交易でも活躍した人々がいたようです。

（4）漁村の歴史・生活

本市の南部地域に残る木負《西浦》や立保《西浦》・足保《西浦》、戸田や井田《戸田》といった地名は、古代に遡る古い地名で、古くから海に携わる人々が住んでいました。戦国時代以降、津元（網元）を中心に団結して漁業が営まれており、津元や村役人の家に伝わる多数の古文書は、戦国時代以来の漁村の歴史を物語る大変貴重な史料です。渋沢敬三は長浜《内浦》の大川四郎左衛門との出会いから、これらの多数の古文書を収集・記録し『豆州内浦漁民史料』として発表しています。

静浦地区から西浦地区にかけては、駿河湾を回遊してきたマグロを始めとする大型魚などの群れを捕らえる建切網漁が行われていました。建切網漁は、大正時代中頃までは、潮の流れに乗った魚の群れが春から冬にかけて岸に近づいてきたことから、盛んに行われていました。建切網漁とは、岩礁が多い海底地質によって一般的な曳網漁ができない地域でも、数種類の帯状の網を順に内側に張り回していくことによって、魚の群れを囲



『豆州内浦漁民史料』



マグロ漁の絵馬（金桜神社）



い込んだ範囲を岸へ向かって次第に狭くしていき、最後には岸に寄せて魚を捕らえることができるという独特な漁法です。こうした漁撈用具は歴史民俗資料館に保存され、漁の様子は神社などに奉納された絵馬にも描かれています。

また、この地域は平地が少ない土地柄ですが、明治以降は斜面を活用して温州ミカンの栽培が盛んになり、地域の重要な産業に発展しました。

大瀬崎《西浦》にある大瀬神社は、周辺の漁民の信仰を集め、船の新造時には模型を奉納する伝統があります。また、大瀬まつりは女装した男性が踊る祭りとして有名です。このほか、江浦の水祝儀《静浦》など伝統的な行事も残っています。

3 “東西をつなぐ街道沿いの発展”

本市には古代から東西を結ぶ街道が通っていました。これらは関東地方への入口である箱根へとつながる街道であることから、日本列島の交通網の発展において、今でも重要な意味を持ち続けています。

千本浜海岸沿いを通る街道はのちの東海道となり、愛鷹山の山裾にも現在の富士市から三島市に通じている根方街道がありました。東海道には沼津宿と原宿が設置され、近世以後往来が盛んになっていくと、街道沿いは現在の市街地の原型ともいえる発展を遂げていきました。一方、根方街道は、中世まで主要街道としての機能を有していた時期もありましたが、近世以降その機能が東海道に移ったことから、相対的に東西を結ぶ機能は低下しました。それでも山裾の各村を結ぶ街道として生活を支え続けたことから、街道沿いには今でも大きな屋敷や寺院などが見られます。

(1) 街道を行き交う人

本市の発展は街道の発展とは無縁ではなく、東海道と根方街道の2本の街道は、現代にいたるまで重要な意味を持ち続けました。これらの街道は、少なくとも古墳時代には機能し始めており、このことを裏付けるように、荒久城山古墳《浮島》を代表例とする愛鷹山麓の古墳群には馬具の副葬が目立ちます。馬具の中には補修されたものも見られることから、実用品として利用されていたことがわかります。本地域を行き交う人々が馬を利用していたことを示す資料です。

また鎌倉時代以降の紀行文には、「浮島が原」や「千本松原」を行き交う人々の様子が記されています。さらに、南北朝の動乱期には双方の軍勢がこれらの道を行き来し、本市周辺も戦いの場となりました。

(2) 境目の城

戦国時代の本市は、東西を結ぶ東海道と根方街道が通り、その間を結ぶ南北の道があって地政学的に重要な地域であったため、ここを舞台に戦国大名が争いました。駿河国を治める今川氏などの戦国大名と、伊豆国や相模国を治める北条氏が領土を奪い合い、



何度も戦火に巻き込まれました。興国寺城は駿河国の東部地域の中心的な城郭であり、北条早雲こと伊勢宗瑞が戦国大名になるきっかけとなった城として有名です。その後、武田氏によって車返宿周辺に三枚橋城（後の沼津城）が築城され、地域の中心的な役割は興国寺城から三枚橋城へと移りました。

（3）東海道沼津宿と沼津城

沼津宿は中世の車返宿を元にして成立しました。宿は狩野川の右岸沿いにあり、水運の拠点として河岸の機能も備え、陸路と水路の結節点として発展しました。関ヶ原の戦いの後に三枚橋城に封ぜられた大久保忠佐が死去すると、後継ぎがいなかったため城は破却されましたが、その後水野氏が領地を与えられ沼津城を整備すると、沼津宿は城下町としても発展しました。



沼津城と沼津宿を描いた浮世絵
「末広五拾三次 沼津」
（国立国会図書館蔵）

（4）東海道原宿

原宿は規模の小さい宿場でしたが、帯笑園と白隠禅師は全国に知られていました。帯笑園は原の植松家が代々伝えた庭園です。江戸時代には、東海道を往来する大名や公家のほか、岸駒、岸岱など当代一流の文化人も来園し、文化交流が生まれました。

白隠禅師は原の出身で、各地で修行したのち松蔭寺《原》の住職となり、禅の教えを庶民にまで広めたため、臨済宗中興の祖と称されています。松蔭寺には、白隠に教えを請う僧が全国各地から集まりました。修行僧の宿泊は、原宿の他の寺院が受け入れるなどして、まちぐるみで修行僧を支えました。



白隠禅師誕生地

（5）愛鷹山裾の古道“根方街道と鎌倉古道”

現在の根方街道は明治時代に江原素六の尽力によって直線的に整備されたもので、浮島地区には地元の人が鎌倉古道と呼ぶ古い根方街道の名残があります。根方街道沿いには古くからの集落も多く源頼朝に関わる伝承も残ることから、中世以前は東海道のもととなる千本浜海岸沿いの街道と並び主要な街道であったと考えられます。

（6）鉄道と沼津



明治22年（1889）東海道本線が開通し、沼津停車場（沼津駅）が開業すると、冬でも温暖な気候や、松林が続く海岸の景観の素晴らしさから本市は保養地として人気を集めました。沼津駅開業以前から大山巖^{おおやまいわお}や西郷^{さいごう}従道^{つぐみち}などの政府要人の別荘がありました。開業と前後して当時皇太子であった大正天皇の静養先として沼津御用邸が設置されました。このほか財界人の別荘や旅館も建ち並び、多くの人々が滞在するようになりました。



絵葉書「沼津町停車場（沼津駅）」

（7）川・海の道

東海道沼津宿は、宿屋^{やどや}と問屋^{とんや}を中心とした宿場としての機能のほか、狩野川の水運の河岸としての機能があったことが特徴です。狩野川を下ればすぐに駿河湾に出ることができ、江戸時代には江尻^{えじり}（静岡市）を結ぶ船便が往き来していました。近代に入っても、狩野川右岸には石蔵などが建ち並び、物資の陸揚げ・船積みが盛んでした。その様子は、絵葉書などで見ることができます。石蔵の一部は現在も残り、往時の繁栄を伝えています。

（8）狩野川の橋・渡し

近世の絵図を見ると、狩野川の両岸に渡し場が描かれ、船で川を往き来していたことがわかります。近代には、狩野川には橋が架けられ、対岸との往き来は渡し船から橋へと変わりました。沼津駅で下車した皇族は、狩野川の湊橋^{みなとばし}（現御成橋^{おなりばし}）を渡り沼津御用邸へと向かい、この橋を起点に道路網の整備が進みました。現在では観光用に復活した我入道^{がにゅうどう}の渡し船で、かつての往来を体験することができます。

4 “古代に始まる信仰の軌跡”

市内には歴史ある寺院や神社が数多くあり、駿河国最古級の古代寺院や延喜式内社^{えんぎしきないしゃ}に比定されるものもあります。また地域の人々の信仰によって造られた石造物なども多数残されており、信仰に関わる貴重な歴史文化資産を今に伝えています。

（1）仏教の伝来と信仰

日吉廃寺跡^{ひよしはいじあと}《第五》は、飛鳥時代に県内でもいち早く造営された古代寺院跡です。発掘調査では、仏像の一部や奈良県桜井市の山田寺と同系統の屋根瓦が出土しています。また、清水柳北1号墳^{しみずやなぎきたいちごうふん}《金岡》は日吉廃寺と同時期の古墳ですが、上円下方墳^{じょうえんかほうふん}という形



態をしています。古墳の形も珍しいですが、伝統的な古墳の埋葬方法ではなく、亡くなった人を火葬して石櫃に入れ埋葬しています。この埋葬方法は、仏教文化に影響を受けたものです。さらに、宮下古墳《大岡》からは水瓶や銅鏡などの仏具が出土しています。以上の資料から、本市には早くから仏教文化が取り入れられていたといえます。

平安時代の終わり頃には、末法思想の影響で経を埋納する風習が生まれました。市内にも、三明寺経塚《門池》など、何か所も経塚が造られたことがわかっています。

(2) 古刹

現在の市内の寺院は、日蓮宗の寺院が多い傾向にあります。これは日蓮上人やその弟子による当地での熱心な布教活動の結果です。我入道《第三》の曼陀ヶ原の松など日蓮上人に関わる伝説も残っています。光長寺《門池》は今でも塔頭が立ち並ぶ寺院です。また、南部地域には、禅長寺《西浦》、宝泉寺《静浦》などを中心に臨済宗の寺院も多くあります。



光長寺仁王門

こうした寺院の中には、より古い時代に起源をもつものもあり、弘法大師伝承を持つ寺院もあります。

(3) 白隠禅師と松蔭寺

松蔭寺《原》は江戸時代に白隠禅師が住職を務めた寺として有名です。寺には自画像や注釈が書き込まれたお経など白隠禅師ゆかりの品々が伝わっています。松蔭寺以外の寺院や民家にも白隠禅師ゆかりの歴史文化資産が数多く残されており、例えば赤野観音堂には白隠禅師が揮毫した扁額が残され、白隠禅師が描いた禅画も各所に伝えられています。



白隠禅師墓

(4) 歴史ある神社

市内には延喜式内社に比定される神社が数多く残っており、人々の信仰によって今なお守られています。富士山を信仰する浅間神社が各地にあり、古代の玉づくりに由来があるとされる玉造神社《第四》や、京の貴族の寄進によって創立された日枝神社《第五》、海の神を祀り男性が女装して踊る祭りが行われる大瀬神社《西浦》、愛鷹山に生息していた馬を神馬とする桃澤神社《愛鷹》、本市に移住した旧幕臣が祀った東照宮を起源とする



城岡神社《第一》などがあります。

(5) 神社・寺院が伝える歴史文化資産

神社・寺院は、数多くの歴史文化資産を有し、それを今に守り伝えています。伝統的建築の建物や信仰の対象となっている仏像、寺の歴史を物語る数々の奉納物・寺宝、ご神木などの境内の樹木、神社・寺院に伝わる伝説など数多くの歴史文化資産があります。また、境内には寄進などによって石造物が数多く建立されています。神社には鳥居や灯籠、手水鉢など、寺院には



重寺観音堂の巡拝塔

石仏、墓石、庚申塔などが見られます。また、本市では江戸時代から「駿河伊豆両国横道」などの観音霊場巡りが盛んでした。重寺観音堂《内浦》などの札所には、無事巡礼から帰ってきた巡拝者により、巡拝塔が造立・奉納されています。

5 “自然を制する叡智”

本市は山地や海、川・湖沼といった自然に恵まれ、人々はその恵みを活かして暮らしてきました。しかし、豊かな自然環境は、時には災害をもたらしたり、農業にとっては厳しい条件になったりしました。そのため、人々は、過去の教訓を活かして自然災害に備えるための施設を造ったり、道具や方法を工夫して低湿地帯での稲作を行ったりして、災害や自然環境を制する営みを続けてきました。

(1) 自然災害への備え

平沼吹上遺跡《浮島》や下石田原田遺跡《大岡》では、発掘調査によって地震による地割れが見つかり、縄文時代や古代の地震被害が明らかになっています。安政東海地震では、津波や液状化、土地の陥没などの被害がありました。先人の記録がこの時の被害を伝えており、防災のための資料として役立っています。こうした自然災害の記録は古文書以外にも、戸田地区の平目平のように地名として伝承（津波が川を遡り、河口から2キロメートル、標高36メートルの地点まで達し、ヒラメがあがったというもの）されています。また、災害を記録した石碑（自然災害伝承碑）は後世に注意を促しています。

過去の災害の教訓から、津波や洪水から命を守り、災害に備えるための施設が造られています。狩野川台風で甚大な被害を受けた狩野川流域では、堤防の整備に加えて、増水時に狩野川の水を伊豆の国市から口野《静浦》に流すための狩野川放水路が建設されました。また、大型展望水門「びゅうお」《第二》は沼津港とその周辺を津波から守るために造られたものです。



(2) 浮島沼との共生

本市の西部地域にはかつて浮島沼^{うきしまぬま}という沼地だった低湿地帯が広がっています。ここは縄文時代に千本砂礫^{せんぼんされきす}州が陸地化したことにより、後背地に生まれた大きな湖沼だったところです。弥生時代から湖沼の沿岸では水田稲作が営まれていたようですが、低湿地環境での稲作は昭和中ごろまで残っており、胸や腰まで田に浸かりながらの深田^{ふかだ}の田植えや、大雨で田が流れるといった話が伝わっています。江戸時代には低湿地帯での新田開発が盛んに行われ、一本松新田^{いっぽんまつ}《原》や助兵衛新田^{すけべえ}《原》など新たな村が誕生しました。また、弥生時代の雌鹿塚遺跡^{めがづかいせき}《原》、雄鹿塚遺跡^{おがづか}《原》からは大量の農耕具などの木製品が出土しており、低湿地帯で使用された農耕具の形態は県の有形民俗文化財である「浮島沼周辺の農耕生産用具」にも継承されています。



低湿地環境での稲作

一方、稲作にとっては悪条件の低湿地帯ではありますが、漁撈^{ぎょろう}や鳥猟を行う自然環境は整っており、使用した道具も残されています。漁撈は、釣漁・網漁・突き漁・シバ漬け漁・釜漁・ウナギバサミ漁・ヒブリ漁などの多様な漁法が行われ、鳥猟は、オキ網・モリ・カスミ網などを使った漁撈とよく似た方法が行われました。

6 “人々の生活を支えた伊豆石”

伊豆周辺から採掘される石は「伊豆石」と総称され、主に安山岩質の硬石、凝灰岩質の軟石があります。本市ではこの2種類の石材が採掘され、人々のくらしの中で使用されるだけでなく、東京圏など遠方へも出荷する産業として地域経済を支えていました。



井田不動明王像

(1) 伊豆石が使われた歴史文化資産

私たちの身近には、伊豆石が使用された歴史文化資産があります。例えば、井田松江古墳群《戸田》の石室には、安山岩質の石が使用されています。また内浦・西浦地区には、近世や近代の石蔵をはじめとした伊豆石建造物が数多くあります。蔵だけでなく、住宅の1階を石積みにするなど、建築材として建物に多用されるのは、石材の産地ならではのいえます。旧沼津御用邸《第三》の石塀も静浦地区産の伊豆石で建てられました。

壺山寺^{りょうぜんじ}の五輪塔^{ごりんとう}《第四》などの中世の石塔は、本市近隣の石が利用されたと考えられます。井田の不動明王像^{いたふどうみょうおうぞう}《戸田》は、江戸時代に將軍墓所の宝塔石^{ほうとうせき}を切り出したことが記されており、石に刻まれた文字は歴史的資料として価値が高いものです。寺院や古い



道沿いにある庚申塔などの石造物も身近な歴史文化資産です。さらに日々の生活に関係が深いものでは、石の臼や竈などの石製品もあります。

寺院や共同墓地に残る古い墓石にも伊豆石が使用されています。こうした墓石には歴史資料としての意味をあわせ持つものもあります。

(2) 沼津の石材産業遺跡

近世になると、伊豆石はこれまで以上に大規模に採掘されるようになりました。特に江戸城築城の際には、石垣石材調達のため、西浦・戸田地区には数多くの石丁場が設けられ、安山岩質の石材が切り出されました。切り出されたまま現地に留め置かれた石材は、預かり石として地域住民が管理し続け、需要がある際に江戸などに出荷されました。その記録は地元の古文書に克明に書き記されています。

近代には、静浦・大平地区で民間用の凝灰岩質の石材切り出しも盛んになり、各地で採掘が行われました。石材は地元だけでなく首都圏や清水港（静岡市）などに運ばれ、様々な施設に利用されて、日本の近代化の発展に貢献しました。

7 “紙と文字により語られる沼津の歴史”

本市には、紙などに記された文字史料が多く残されており、中でも、質、量ともに豊富な中世・近世の古文書、明治時代初期に沼津兵学校が出版した「沼津版」などは、全国に知られています。これらの文字史料は、記された時代の政治・経済・社会などの状況を雄弁に物語ることから、この地域の歴史文化を現在まで伝える役割を果たしてきました。

(1) 地方文書・区有文書・役場文書など

近世には各地で、支配者と民衆との間や支配者同士・民衆同士でも、様々な場面で文書が作成されました（地方文書）。特に行政関係の公的な文書は、作成を担当した村・宿の名主などの家に伝来したほか、明治以降は大字（旧村）で共有の書類（区有文書）として残されました。明治22年（1889）の市制町村制施行以降は、旧村が合併し誕生した村役場や町役場（後に市役所）によって、行政文書（役場文書）が作成され、保存されることとなりました。

(2) 人物の書

大名・文人・政治家・実業家など、地域史に名前を残した人物の書は、掛軸、色紙、短冊、扁額、屏風、原稿などの形で、公的な施設や神社・寺院、個人宅など、さまざまな場所にあります。



徳川慶喜書「沼津巽」

(3) 印刷・出版



江戸時代から明治前期までの書籍は木版で印刷されるとともに、地方出版が盛んでした。明治後期からは活版印刷が主流となり、のちには東京の大手出版社が市場を占めますが、本市でも地元書店が出版した書籍や新聞が多く存在しました。沼津兵学校が幕府旧蔵の活版印刷機を用いて印刷した「沼津版」は、その先駆けてした。明治前期では、尚古軒、擁万堂、盛秀堂、蘭契社といった書店が、本の小売りのみならず、盛んに出版を手掛けました。印刷会社も多く生まれ、明治後期や大正期以降は、文芸の同人誌や中等学校の校友会誌などが刊行されました。新聞は明治10年代に創刊されたのが最初で、以後、断続的に現代に至るまで地方紙の発行が続いています。

(4) 文庫・コレクション

近世や近代において個人が収集した書籍（本）が、文庫・コレクションとしてそのまま維持されている例も少なくありません。例えば沼津文庫は、沼津兵学校が幕府から引き継いだ書籍をもとに、明治20年代に公立図書館の蔵書として誕生した貴重な書籍群です。

8 “文化人と沼津”

近世以降、本市は多様な文化人が輩出し、また多くの文化人が訪れたため、文化人ゆかりの歴史文化資産が各地にあります。さらに、歴史文化資産を守る文化人もいました。

(1) 沼津ゆかりの文化人

江戸時代、本市は三津《内浦》出身の俳人六花庵官鼠、木負《西浦》出身の棋士本因坊丈和などの文化人が輩出しました。沼津藩主に求められ馬の彫刻を献上したといわれる彫刻師の舟仙の作品は、今でも本市に残されています。

近代以降では、若山牧水（歌人）のように本市の景観に惹かれて移住した人物や、芹沢光治良（作家、我入道《第三》出身）・井上靖（作家）・明石海人（歌人、《片浜》出身）・大岡信（詩人）・山口源（版画家）・赤堀尚（画家、小海《内浦》出身）・佐野丹丘（書家）・秋山公道（書家、重寺《内浦》出身）など、本市と深いつながりのある人物がいます。千本浜公園《第二》や大瀬崎《西浦》、御浜岬《戸田》などの優れた景観の地には、そこで詠まれた歌や作品の歌碑・文学碑などが造られており、文化人の足跡がしのばれます。このほか、『豆州内浦漁民史料』を刊行した民俗学者の渋沢敬三や本市に別荘があった鳥類学者の黒田長禮など、本市にゆかりのある文化人は少なくありません。

(2) 帯笑園・植松家と文化人との交流

帯笑園は原の植松家が代々伝えた庭園です。江戸時代には、東海道を往来する大名や公家、文化人が来園したことが、芳名帳に記されています。また、シーボルトが来園し、『江戸参府紀行』で絶賛したことで知られています。明治時代には、当時皇太子であ



った大正天皇が度々訪問しました。帯笑園は名園としてだけではなく、文化交流の場としても知られています。6代当主植松季英（蘭溪）は京都の文化人とのつながりが深く、円山応挙や池大雅、岸駒などとも交流がありました。特に季英の子の季興が円山応挙に弟子入りし、応令の雅号を授かっています。

（3）文化人ゆかりの地・作品の舞台

千本松原の景観や、南部地域の海岸の情景は文化人たちを惹きつけました。安田屋旅館《内浦》は太宰治の作品製作の場となりました。また、旧三津坂隧道《内浦》のように文学作品に登場するものもあります。最近では内浦地区周辺や市街地がアニメ「ラブライブ！サンシャイン!!」の舞台となり、映画やテレビドラマの撮影も市内各地で行われています。

（4）文化人が守る歴史文化資産

本市には、蒐集家によって守られてきた歴史文化資産も少なくありません。本市の実業家矢部利雄氏が蒐集した刀剣をはじめとする歴史文化資産が、三島市の佐野美術館に寄託されています。これらは旧大名などが所蔵していたものですが、様々な理由から戦後売りに出されていたものを、矢部氏が蒐集し、大切に保管してきました。